

# 「宮本武蔵」

徳願寺から、柏井と船橋市藤原の境

蓆むしろを解あき、桐油あぶらびきの紙しを解あいて伊織が―

「これは粟あわ、これは小豆あずき、これは塩魚しおうお―」

と、いくつもの袋をならべ、

「先生、これだけあれば、

ひと月やふた月、水が退ひかなくなっても、

安心あんしんだろ」と、いう。

(中略)

武蔵はその不審たふを糺ただすと、伊織は事もなげに、

「おらの巾着きんちやくを預あづかりて、

徳願寺様から借りてきた」と、いう。

「徳願寺とは？」と聞くと、

この法典ヶ原から一里余り先の寺で、

いつも彼の亡父ちちが、

(おれの亡なき後、独ひとりりで困こった時は、

この巾着の中にある砂金を少しづつ費つかえ)

といわれていたのを思い出し、常に、

肌身みみに持もっていたその巾着を預あづかりて、

寺の庫裡くらから借りて来たのだ―と、

伊織はしたり顔に答こたえる。

吉川英治著「宮本武蔵」より



左上／徳願寺。  
中／宮本武蔵の供養塔。  
下／宮本武蔵が描いたとされる「だるま絵」。  
右／孤児である伊織とともに暮らした法典ヶ原周辺。

